

[論 説]

青年ジャマーアトの思想の変遷：
急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

Radicalization of Youth Jamaats: focusing on Islamic legal
discourse and legitimacy

小 野 瑞 絵

0. はじめに

ペレストロイカに始まるソ連邦解体を契機に北コーカサス地方全体のイスラーム主義は急進化していった。本稿では人物や組織が急進化していく過程に注目する。とりわけ北コーカサス全体に急進的イスラーム主義を拡大するうえで中心的役割を果たした「青年ジャマーアト」の思想の急進化に焦点をしぼる。本稿の分析対象は、北コーカサス地方におけるイスラーム主義が顕在化し始めた90年代から2007年の「コーカサス首長国」建国に至る時期とする。ソ連末期に顕在化した民族主義が契機となったチェチェン紛争では、対立軸の移行が複数回起こり、最終的に独立運動が、汎コーカサス・ジハードへと変化した。このイデオロギー・シフトで中心的役割を担ったのが青年ジャマーアトである。

ヤルルカポフ¹は、カバルダ・バルカル共和国における「青年ジャマーアト」の発生とその急進化の事例に注目し、伝統的ジャマーアトとは異なる「青年ジャマーアト」という概念を確立した。本稿ではチェチェン紛争を契機に連携がすすんだ各地の「青年ジャマーアト」の急進化が、同時期ではあるが個別に起こった点に注目し、個別のジャマーアトを急進化させたそれぞれの中心的イデオロギーの思想の変遷の分析を試みた。具体的には当時最も影響力が大きい青年ジャマーアトであったカバルダ・バルカル共和国、ダゲスタン共和国の二つのジャマーアトのそれぞれの急進化の契機と武装闘争の正当化のレトリックの分析を試みる。この分析により、青年ジャマーアトが、武装闘争を正当化するにあたりどのようにイスラーム法を根拠としたかを明らかにする。同時に北コーカサスにおけるイスラーム法とロシア法と慣習法の混在の歴史が現在における北コーカサスの急進

1 ロシア外務省モスクワ国際関係大学所属のイスラーム研究者。

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

のイスラーム思想を理解するうえで重要であることを強調する。

本稿におけるイスラーム用語の解釈は、主に岩波イスラーム辞典に依拠する。イスラーム用語は基本的に日本語に訳さず、カタカナ表記にした。タームの意味は、時と場所、使用する人のイデオロギーによって変化していくので、より普遍性を持たせるためである。なお、アラビア語起源の単語のカタカナ転記については基本的に岩波イスラーム辞典に依拠したが、北コーカサス地方で定着しているイスラーム用語や人名は現地でのキリル文字による発音に沿ってカタカナ表記した。例えば、アラビア語では発音されないター・マルブータをキリル文字では発音するので、本稿ではター・マルブータを付けた発音としてカタカナ表記した。人名もロシアで活躍した人名はアラビア語ではなくロシア語のアクセントにしたがった表記にした。

1. 青年ジャマーアトとは何か

ジャマーアトの語源はアラビア語であり、集まり、集合体、集会のための場所などを意味する。イスラーム・コミュニティを指すが、現在では穏健派、急進派を含むイスラーム・グループの名称に使われることが多い²。ヤルルカポフ [2008: 143-145] によると、北コーカサスにおける急進化の基本構造はジャマーアトである。この急進的グループを伝統的ジャマーアトと区別して青年ジャマーアトと本稿では呼ぶことにする。

伝統的ジャマーアトではイマームは、ジャマーアトの精神的指導者であり、モスクでの礼拝を指導し、金曜礼拝で説教を行う。イマームの資格は

2 ジャマーアト・アル・イスラミーヤ（エジプト）、ジャマーアテ・イスラミー（パキスタン）、タブリーギー・ジャマーアト（インド）

コミュニティの中から多くの基準を通して選ばれたもっとも賢いムスリムである。クルアーンについての知識、スンナについての知識、宗教儀礼についての知識があるだけでなく、人格的にもすぐれていて、イスラームの教えに沿った生き方をしている必要がある。伝統的ジャマアトは、地理的領域があり、通常ジャマアトの信徒とイマームは密接な関係にあり、金曜日の共同礼拝だけではなく、信徒はイマームに様々な機会に接する [ヤルカポフ 2008:141-142]。

青年ジャマアト（新ジャマアト）は、1980年代終盤から1990年代初頭に、伝統的イスラーム勢力であるダゲスタン宗務局に対抗する形で登場したとされる [ヤルカポフ 2008:142]。その結果、ロシアではジャマアトは「急進的」という意味を示唆するようになった。

1-1. 青年ジャマアトが抱えた二つの対立

青年ジャマアト、ある時は穏健派サラフィーと呼ばれた、二つの集団のイデオログの言説を分析すると、彼らが常に二つの対立を抱え葛藤していたことが明らかになる。一つ目はカーフィル³である非ムスリム（ロシア人）との対立とターゲット⁴、ムナーフィク⁵であるムスリムとの対立

3 不信仰者。一般的には多神教徒、偶像崇拜者などの不信仰者を指す。ムスリムのなかでは誰がカーフィルかという問題は、イーマーン（信仰）、クフル（不信仰）の定義に関係し、神学発生の要因の一つである。青柳かおる「カーフィル」『岩波イスラーム辞典』281頁。こんにち、旧ソ連圏のイスラーム主義武装集団の文脈ではカーフィルは、非イスラーム教徒であるロシア人を一般的にさす。

4 クルアーンに述べられる邪神。現代のイスラーム主義武装闘争派の文献の文脈では、神からの啓示に基づく法であるシャリーアを施行せず、ヨーロッパ法に由来する人定法に則った支配を行う為政者をターゲットと呼ぶ。中田考「ターゲット」『岩波イスラーム辞典』600頁。

5 偽善者。イスラーム宗教思想の鍵概念。ムナーフィクはクルアーンの中では“偽信徒”“えせ信者”“信仰の弱い者”などの意味に用いられている。初期イス

である。二つ目は17世紀からコーカサス地方に続く、イスラーム法対ロシア法の対立とイスラーム法対慣習法の対立である。この背景を理解せずに現在の北コーカサスの急進的イスラーム主義を理解することはできない。誰がカーフィルで、誰がターゲットで誰がムナーフィクなのか。ロシア法とイスラーム法と慣習法の混在の中でどの法がどの法に優越するのか。北コーカサスの闘争の歴史は対ロシアだけではなく、ムスリム内部でのイスラーム法の解釈の対立による闘争の歴史でもある。このイスラーム法の解釈の問題は後述するダール・アッ＝スルフ⁶というイスラーム法的

ラーム共同体の中で、不信仰とは何か、信仰とは何か、という論争が激化し、イスラーム共同体が分裂の危機に瀕した。このとき有力な宗教指導者ハサン・バズリー（728没）は、大罪を犯したムスリムは偽善者（ムナーフィク）であり、悔悛するように指導しつつ、イスラーム共同体の一員として認めるべきであると主張した。松本太郎「偽善者」『岩波イスラーム辞典』303-304頁。

6 平和の家。イスラーム世界との間に和平条約が締結された友好的な世界。ハナフィー学派が、世界の領域をダール・アル＝イスラーム（イスラームの家）、ダール・アル＝ハルブ（戦争の家）の二元世界に分けたのに対して、シャーフイー学派は、この二つの領域的概念の他に、これを唱えた。この概念の捉え方は学派により違いがある。古賀幸久「ダール・アッ＝スルフ」『岩波イスラーム辞典』617-618頁。これらのイスラームの領域的概念を、主権国家を基盤とする現代にあてはめれば、ダール・アル＝ハルブとはイスラーム諸国との交戦国、ダール・アッ＝スルフとは和平条約が締結されている友好国という理解もできる。古賀幸久「ダール・アル＝イスラーム」『岩波イスラーム辞典』618-619頁。尚、ダールとは、世、世界、地域を表す語である。原義は“囲まれた場所”。古典的なイスラーム用語では、自立的な世界や地域をさす語として用いられた。ただし、地域といっても、厳密な境界線をとまなう領域を意味しているわけではない点に注意が必要である。小杉泰「ダール」『岩波イスラーム辞典』617頁。スルフとはイスラーム法において、平和と和解をさす言葉。ムスリムと非ムスリムの共同体が争えば、彼らの間での戦争を中止するだけでなく、ある期間に限って有効な平和の樹立を目的とする契約である。最初に非ムスリムに対するジハード論を強調した法学者は、シャーフイーである。近代に入って、ジハードの教理をムスリムの国際法としてとらえる一解釈は、ダール・アッ＝スルフを友好諸国民の領土と同一視している。山内昌之「戦争と平和」『岩波イスラーム辞典』577-578頁。

国際関係とも関連し、イスラーム地域とロシアとの関係をどう解釈するかという点で重要な鍵となる。

1-2. イスラーム法的正当性

本稿で青年ジャマアートの思想を分析するうえで注目したのは、そのイスラーム法的正当性の根拠が何であるかである。本稿の研究対象である青年ジャマアートを含むサラフィーと呼ばれるイスラーム法に文字通り忠実であろうとする集団は、クルアーン、スンナ、イジュマアの三つのみを原則として、強制力のある法源とする。優先順位は、クルアーン、スンナ、イジュマアの順である。この解釈の為にイスラーム法学と訳されるフィクフが存在するが、フィクフは、しばしば、イスラーム法、シャリーアと同意語で扱われる。スンナ派イスラーム法学の解釈（イジュティハード）をめぐる四大法学派（マズハブ）が存在する。イスラーム世界で学派というタームがさすのはこの法学派のことである。旧ソ連圏で主流の学派はスンナ派ハナフィー学派であるが、北コーカサスはシャーフィイー学派の影響も強い [Sagramoso and Yemelianova 2010: 123]。北コーカサスにモザイク状に広がる学派の違いと分布する多数の民族の関係は旧ソ連圏の中で特に北コーカサスにおける急進的イスラームの影響力が拡大しやすい要因の解明につながるかもしれない。

1-3. 穏健派の武装化とイスラーム法

当初穏健派と呼ばれている集団が急進化し、ジハード主義者になった事例研究は多くある。その多くは植民地闘争とジハードを結びつけたものである。マイケル・ケンパーは、既存の18世紀におけるコーカサス戦争研究が主に植民地闘争の側面を強調している点を指摘し、彼の研究ではジ

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

ハードの正当性についてコーカサス戦争以前から続くイスラーム法的正当性の論争の存在に注目している [Kemper 2002: 265]。本稿は、チェチェン紛争期から大きな影響力を持つようになった青年ジャマーアトの言説の中のイスラーム法的正当性に注目することにより、武装化とジハードの正当化において現在の北コーカサスにおいてもイスラーム法的正当性が重視されている点を強調する。さらに、青年ジャマーアトの思想を理解するためには 18 世紀から続く、シャリーアと慣習法とロシア法の混在と競合という背景に着目する必要性を強調する。特に旧ソ連の大きな三つのイスラーム地域である中央アジア、ヴォルガ・ウラル地域と比較して北コーカサスの急進化が著しい理由がそれぞれの地域のシャリーアと慣習法とロシア法の混在と競合の歴史の相違に関係する可能性を示唆する。

2. カバルダ・バルカル・ジャマーアト

本章では、KBJ の思想の変遷を追うとともに、武装闘争の正当化におけるレトリックの中で彼らがカーフィルとその他を明確に区分している点を明かにする。特にその定義づけに注目したい。

2-1. KBJ の発生

チェチェン紛争後の 2000 年半ば、ダゲスタンのサラフィー主義者の主要な拠点が制圧された後に、アステミロフとムコジェフのカバルダ・バルカル・ジャマーアト（以後 KBJ⁷）が最も有名な組織されたネットワークになる [Yarlykapov 2008: 141]。シュテリンとヤルルカポフの研究 [Shterin and Yarlykapov 2011: 303-325] によると、1990 年代後半、KBJ は暴力を許

7 のちにヤルムク・ジャマーアトに改名。

容する他グループに対抗する為、教育システムを設置した。アステミロフはKBJを、ヒズブッターフリール⁸やヌルジュ⁹を含む、すべての急進派に対抗するグループであると描写していた。クルアーンとハディースに基づく生活を世俗国家の中で行うことを目標としており、指導者には必然的に具体的な道德行為、政治行為を指導する義務が発生した。指導者であるムコジェフは雄弁家であり、アステミロフは理論家であったと言われている。KBJは、メンバーが他の暴力的グループに流出することを防ぐため、教育で対抗していた。アステミロフはペレストロイカ期つまりイスラームルネサンス期にイスラーム教育の新たな担い手とするため、そもそも地元の宗務局がサウジアラビアに留学させた人物である。しかし、地域の慣習と結びついた伝統的イスラームを認めないアステミロフらの「新しいイスラーム」を地域の伝統派と当局と宗務局は潜在的な脅威とみなすようになった。

2-2. 穏健派からの転向

以下の文章は、アステミロフが草稿を書いたウマロフによるカフカス首

8 パレスチナのイスラーム法学者ナブハーニーにより、イスラーム国家の樹立とエルサレムの解放を主目的として、1949年、ヨルダンで結成されたイスラーム政党。正式名称は Hizb al-Tahrir。解放党は、今日のイスラーム諸地域はイスラーム法が施行されていないため、すでにダール・アル＝ハルブに転化したとみなし、再びそれをダール・アル＝イスラームに戻すためにカリフ国家の樹立がすべてのムスリムの義務である、と考える。中田考「イスラーム解放党」『岩波イスラーム辞典』127頁。

9 ヌルスィー（1873・76-1960）を開祖とするトルコ最大のジャマアト。やや侮蔑的な響きを持つ「ヌルジュ」は他称であり、自称は「ヌル・タレベリ」である。総じて反体制を標榜せず、活発に経済、教育、メディア活動を行う。粕谷元「ヌルジュ」『岩波イスラーム辞典』729-730頁。

青年ジャマアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

長国建国宣言¹⁰の一部である。

2007年11月22日

アッサラーム・アライクム・ワ・ラフマトゥ・ワ・バラカアトゥ
(あなた達に神の平安と慈悲と祝福がありますように)

私のメッセージは、コーカサスで戦っているムジャーヒディーン、そしてウラル、シベリアその他ロシア支配下の地で抑圧されているムスリム達へ向けたものである。

まず彼は歴史的連続性に触れ、次のように述べている。

我々の祖先達は、この敵（ロシア人）にジハードを遂行してきた。そして、今アッラーは、父達と同様に我々の世代を試している。すべては繰り返される。ジハードは信仰と背信を明らかにする。こんにち、過去にそうであったように、人々は、ムジャーヒディーン、偽善者そして背教者に分けられる。私が話しているのはカーフィルについてではない。・・・

ここで、彼は、コーカサス首長国の正当性を過去のイスラームの名の下に行われた独立運動との連続性によって強調している。彼は、「私が話し

10 Amir Dokka “The official version of Amir Dokka’s statement of declaration of the Caucasian Emirate”, URL: <https://news.worldofislam.info/index.php?page=Chechnya/001>
最終閲覧日：2018年11月10日。

〔論 説〕

ているのはカーフィルについてではない」と強調し、彼が、3つのグループに分けた、「ムジャーヒディーン、偽善者、背教者」のうち、「偽善者、背教者」はカーフィルではない。つまり非ムスリムのことではなく、ムスリムを偽善者、背教者と責めているのである。ここに後のムスリム対ムスリムの争いの予兆が見られる。ドゥダエフから「チェチェン・イチケリア共和国」の急進派であるバサエフ等まで紛争初期からの指導者の敵はあくまでもカーフィルであるロシアであったのに対し、アステミロフが書いたウマロフの宣言はタクフィール¹¹の思想がみられる。つまり彼は、ムジャーヒディーン以外のムスリムを偽善者、背教者とみなすことにより、カーフィルであるロシアだけでなく、自派に加わらないムスリムにも敵対姿勢を示している。ジハードと殉教はアッラーへの道だと語った後、正当化は以下のように続く。

すべてのジハードの指導者は彼の教義の解釈と置かれた状況によって語り、行動する。我々は指導者達を批判しないし、批評しない。ただ我々と彼ら（指導者達）にアッラーの慈悲を請うのである。

彼は教義の解釈や行動が必ずしも正しくないと考えていたのかもしれない。また、将来の首長国の活動が、必ずしも教義の正しい解釈による行動でなくなると想定していたゆえであろう。この宣言が特別なイスラームの教育を受けていないウマロフによって書かれたものではないことは文中の

11 ある人間・集団をカーフィル（不信仰者）と宣告すること。タクフィールの議論を最初に提起したのはハワリージュ派である。彼らは、ある信徒が悪・罪を為した場合、その時点で信仰は消失すると考え、その信徒に対してタクフィールを行い、殺害の対象とした。現代では、タクフィールの対象と対応に関しては、さまざまな立場がある。菊池達也「タクフィール」『岩波イスラーム辞典』600頁。

青年ジャマーアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

イスラームの深い知識に基づく言及からうかがわれる。次の言葉はウマロフではない宣言の草稿執筆者であるアステミロフの本心であろう。

最も高貴な方（神）は知っている。私がそれを望まないことを、その責任を求めていることを、私がこのような重荷（ジハード）を負うとは思いませんでした。しかし、それが私の定めなら、アッラーの導きにより、私はジハードを指揮し組織しよう。

以下は首長国建国の宣言である。

私は、すべてのムスリムに宣言する。「アッラーの他に神無し」という旗の下に不信心者への戦争を遂行することを。これは私、コーカサスのムジャーヒディーンのアミールは全ての偶像崇拜に関するものを排除するという意味である。私は、世界中のすべてのカーフィル¹²が制定した法を排除する。

私は、不信心者によってコーカサスの地に成立したすべての法律とシステムを排除する。私は、不信心者によってムスリムを分割するために使用されたすべての名称（地名をさすと思われる）を排除し、非合法とすることを宣言する。

私は、「北コーカサス」「ザカフカス（南コーカサス）」などの名がつく、民族的、領域的、植民地的な地域（分割）を非合法化することを宣言する。

私はここに公式にコーカサス首長国の建国を宣言する。

12 原文で kafir（アラビア語）と書いてあるものは「カーフィル」、infidel（英語）と書いてあるものは「不信心者」と訳している。

建国宣言で、ジハードを宣言し、不信心者によって決められた領域と名称を拒絶した後、彼は首長国の構成をこう述べている。

すべてのコーカサスの地で、私にバヤト（誓い）をたてたものは、ジハードを遂行する。（以下の地域も）コーカサス首長国のウイラーヤ¹³と宣言する。ダゲスタン・ウイラーヤ、ノフチョ・ウイラーヤ（チェチェン）、ガルガイチャ（インギーシ）・ウイラーヤ、イリストン（オセチア）・ウイラーヤ、ノガイ・ステップウイラーヤ、カバルダ・バルカルおよびカラチャイ・ウイラーヤ。私はコーカサス首長国の中に国境を設ける必要があるとは思わない。

各ウイラーヤには、数十のジャマーアトが所属する。この先ラドニッツが1999-2002年の言説にはほとんど使用されていなかったと指摘している[Radnitz 2006: 237-256]、「イスラーム用語」が頻出する。

コーカサスはカーフィルと背教者によって占領されているので「ダール・アル＝ハルブ」であり戦争の地である。我々の目下の使命はコーカサスを「ダール・アッ＝サラーム」とし、シャリーアを採用し、カーフィルを追放することである。次に、カーフィルを追放した上で、我々はすべての歴史的にムスリムの土地である地域を全て再征服しなければならない。そして、その領域はコーカサスを超えるものである。

13 アラビア語。行政区域を意味する。オスマン帝国のカリフ制でこの行政区域が使われた。

青年ジャマーアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

ここでダール・アル＝イスラームではなくダール・アッ＝サラームという単語を使用しているが、ダール・アッ＝サラームはしばしばダール・アル＝イスラームの同義語として使用されている。アラビア語サラームの文字通りの意味は「平安」「和平」「樂園」である。

似た言葉にダール・アッ＝スルフという言葉が存在し、後述するがこれは別の概念である。この宣言文にはコーカサスをダール・アル＝イスラームと見なす条件に関するコーカサス首長国の見解は示されていない。

最後の文面に、背教者を糾弾するタクフィールの思想が再び現れる。

そして、私は再認識を促す：カーフィルと地元の協力者である背教者は排除の対象である。権威の主体ではない。

ここではっきりとカーフィルに協力するムスリムである地元住民は背教者であると宣言している。

2-3. カーフィルとその他の区分

この宣言文は、カーフィルとその他、つまりカーフィルとターゲットとムナーフィクをはっきりと区別して定義している。カーフィルは、非ムスリムであるが、ターゲットとムナーフィクはムスリムをさす。これにより、自派以外のムスリムへの攻撃が正当化される。つまり、彼は、非ムスリム（カーフィル）との闘争とムスリム（ムナーフィク、ターゲット）との二面闘争を宣言しているのである。カーフィルであるロシアへの宣言でもあった建国宣言に対し、次に紹介するのは地元のムスリムへの手紙である。上述の建国宣言の中で、彼は、カーフィルではないムスリムを「ム

ジャーヒディーン、偽善者、背教者」に区分しているが、次の手紙はこの三者の区分について書かれている。

2004年12月、ナリチクの連邦薬物管理局が攻撃され、アステミロフ、イリヤス・ゴルチハノフ（タリバン・ジャマーアトの指導者）に嫌疑がかかるが、アステミロフは地下に潜伏した後であった。2005年10月13日、200人以上の武装勢力がナリチクのカバルダ・バルカル共和国の治安関係の建物を攻撃した。アステミロフとムコジェフは、地下潜伏中にいかに暴力を正当化する理論に傾いていったかを示す手紙をそれぞれ書いている。アステミロフは、2006年5月29日付で「敗北と同じく、勝利もまたアッラーの意思なり¹⁴」と題する手紙をカフカス・センターに投稿している。

手紙は、ジャマーアトの創設が1998年だったことを明かし、当初は14グループで構成されていたが後に二倍になっていること、月に一度評議会が開催され、そこで重要事項が決定されていたことが明らかになる¹⁵。次

14 「Кабардино-Балкария: На пути к катастрофе. Предпосылки вооруженного выступления в Нальчике 13-14 октября 2005 года» 付録、アステミロフの手紙 2006年5月29日付「敗北と同じく、勝利もまたアッラーの意思なり」URL: www.kavkaz-uzel.ru/articles/142989/, 最終閲覧日：2018年11月10日。

15 「1998年秋にこれらグループのリーダー（アミール）たちはナリチクのあるモスクに集まり単一の共同体（ジャマーアト）創設を決定した。アミールが選出され全員の共通方針（綱領）が採択された。この時「カバルダ・バルカル共和国共同体」には14グループが加盟しており、のちにその数は二倍になった。月に一度マジリス・シューラ（アミール評議会）が招集され、そこでは共和国内の情勢が討議され、決定が行われた。このマジリスはアミールを再選挙することができた。マジリスに付属する共同基金が創設され、共同体メンバーは納付金や喜捨をそこへ集めた。指導部は共同体内の関係を調整し、またイスラームへの呼びかけ、宗教教育や慈善事業に取り組んだ。その他「カバルダ・バルカル共和国共同体」はチェチェンにいるムジャーヒディーンとの連絡を支援し、彼らに様々な支援を提供した。」

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

にチェチェン紛争にどう関わるかについての意見の変遷が語られる¹⁶。チェチェン紛争に参加することがムスリムの義務か、が議題となり彼らを助けるのは義務であると当初語られていたことがここで明らかにされる。

カバルダ・バルカル共和国共同体が創設された時にイスラーム復興の呼びかけとジハードを両立させる決定がとられた。なぜならば、両方がムスリムの義務だからである。マジリスでは幾度となく、もしどこかでムスリムの不信心者に対する戦いが始まれば、各人が彼らを助けるのは義務であると語られた。

その後、KBJが第二次チェチェン紛争で成功した不信心者たち（ロシア当局のこと）が圧迫を強めてきたので、（平和路線に）立場を変えたと次のように述べている¹⁷。ジハードについては、各人の恒常的な義務ではないと当時は認識していたと述べている。

ジャマーアトに関し、ジハードとその準備は各人の恒常的な義務ではなく、アミールが宣言した時だけの義務であると公式に意見が確認された。（中略）言葉の上でこそアミールたちはジハードを否定しなかったが、実際には残りの者たちへの模範を示しながら平和な生活を

16 「チェチェンに対するロシアの二度目の戦争が始まると、一部の共同体メンバーは戦闘に参加したが、このことを知っていたのは限られた数の人々であった。」

17 「そののちチェチェンで確かな成功を収めた不信心者たちが、その外にあるムスリム共同体への圧迫を強めてきた。この圧迫の結果として共同体の指導者たちは様々な問題に対する自分の立場を変えた。とりわけムジャーヒディーンに対する支援を制限する決定が取られ、共同体に害を及ぼさない限りで助けることとなった。」

[論 説]

送ったのである。

しかし、ここで大きな方向転換が示される。細部の決定ではなく、そもそも共同体の在り方自体が間違っていたと主張するのである。ここで彼は世俗政権との共存をはっきりと拒否する方針を示している。

そもそもの初めからこの共同体のモデルは正しくなく、シャリーアに基礎を置いていなかったと言わなければならない。現実にはイスラームのリーダーになれるのはカリフかイスラーム国家の元首だけであり、世界中のムスリムは一つのジャマアトである。

そして、宗務局や世俗政権との共存を「ダール・アル＝イスラーム」であると解釈することを否定している¹⁸。また、KBJが穏健派で世俗政権との共存を目指していた点について、次のように述べている。

アミール的意思決定に際して何よりも重要であったのは共同体の利益、その安全および社会全体との関係であった。このために一度ならず信仰の原則が侵害された。(中略) これら様々なことが世論、ジャ

18 「この誤った見解は占領下のアンダルシアにいるムスリムのためにある学者が下した法学的判断から生まれた。このファトワーはロシア国内のいわゆる「宗務局」設置や他の不信心者の国での似たような機関の設立に利用された。このファトワーの意味するところはおおよそ次の通りである：「ダール・アル＝ハルブ（非イスラーム国家）に住むムスリムは団結し、自分たちのために一人の指導者と裁判官を選ばなくてはならない。もしカーフィルがムスリムのためにその中から指導者を選び、ムスリムが賛成すれば、彼はムスリムが従う合法的ワーリーとなる。シャリーアは可能な限り遵守される。」この見解は明らかに根底からイスラームと矛盾している。4つの主要な法学派の視点では、ムスリムはシャリーアが有効な領域へ移住しなければならない。」

青年ジャマアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法の正当性の主張を中心に

マアトの合法性や安全の維持を目的に行われた。シャリーアによれば、これらの行いは信仰の基本原則の一つである「献身および無関係」の侵害と分類され、一部のムスリムが、カーフィルの社会と関わり合いになるのを避けるのではなく、その一部になろうとする試みであると説明される。

つまり、世俗政権との共存を目指したことは共同体の安全および社会との関係のために行ったことであるが、これは信仰の原則を侵害するものであったと説明しているのである。そして、その過ちを正すとして次のように述べている。

自らの活動の誤りを認識しその過ちを正そうと決意して、共同体の指導者たちはジャマアトを次第に創設時のような軍事組織にすることで、その構造を変えようとした。(中略) これと並行してイチケリアの代表者らとの共同行動に関する交渉が行われた。これらの交渉の結果はカバルダとバルカルのみジャーヒディーンたちを、他の北コーカサス諸共和国の兄弟たちの例に沿って、イチケリア・イスラーム国に合流させるというものであった。

続いて、チェチェン、ダゲスタン、インゲシ、カラチャイ・チェルケスのすべてのみジャーヒディーンと、オセチアとカバルダ・バルカルのみジャーヒディーンの一部が、イチケリア元首アブドゥル・ハリムを自らのアミールと認めたと述べている。つまり、第四代大統領アブドゥル・ハリムがイチケリア大統領になった頃には、カバルダ・バルカル共和国を含む周辺諸共和国ジャマアトとチェチェンの汎コーカサス・ジハードの連携

の合意が生まれていたと思われる。チェチェン独立派の勢力の位置づけは汎コーカサス・ジハードに参加している一共和国であったと思われる。彼は、クルアーン¹⁹を引用し、

我々がこれを行ったのは、合同がファルド²⁰だからではなく、これがよりアッラーの意思にかなうからである。

と説明しているが、戦略的な理由と目的があったと説明している²¹。そして、彼は民族主義を有害なものだと考えている²²。彼はナリチクでの武装攻撃がイチケリアへの統合、つまり汎コーカサス・ジハードに参加した直後に行われたことを明らかにし、それが突発的に行われたものではないこ

19 「あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り、分裂してはならない。」(イムラーン家章3:103)

20 義務。イスラーム法上の義務には連帯義務(ファルド・キファーヤ)と個人義務(ファルド・アイン)の区別がある。イスラーム共同体(ウンマ)の構成員のなかの一部がある業務を果たすことにより、共同体全体が当該義務を果たしたことになる場合(ジハードへの参加)には、その義務は連帯義務と呼ばれる。なお、特殊な状況下において連帯義務が個人義務に転化する場合がある(例: 外的侵入時の当該地域全員のジハード参加義務)。両角吉晃「ファルド」『岩波イスラーム辞典』833頁。

21 「つまりムジャーヒディーンの立場は、もしコーカサスの全武装グループが一人の指導者に従い、彼ら全員が共通の政治的要求を掲げるならば、はるかに強いものとなるのである。」「我々はどこかの土地に縛り付けられるものではないが、しかし我々の戦略上の目的は一定の領域に拠点を確保しそこにアッラーの法を打ち立てることにある。」

22 「チェチェンと統合するという我々の決定に不満ないわゆる愛国者がいる。彼らをより動揺させているのはイスラームではなく、彼らの国家主権である。我々はこれを非常に有害な誤解と考え、単一のイスラーム・ネイションに分裂をもたらすいかなるナショナリズムの発現も阻止するつもりである。それらが根本的にイスラームの信条に反することは言うまでもない。」

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

とを述べ²³、そこで、方針転換が告げられる。手紙の冒頭で世俗政権との共存を目指していた頃、「ジハードとその準備は各人の恒常的な業務ではない」と述べていたのに対し、ムジャーヒディーンになることがイスラームとカーフィルに一線を画すと述べている。

ムジャーヒディーンになることで兄弟たちは自らの宗教の懐に戻り、イスラームとカーフィルに一線を画した。その境界はこれまでほとんど消えてしまっていたのであった。共同体ではムスリムの支持者と不信心者の支持者との分離が起きた。祈りをささげるムスリムの中の人々も含め、多くのリーダーと権威の真実性がはっきりした。このような状況でなければ我々が見つけ出せなかった裏切り者が明らかになった。

次第に、彼の論調がジハードに参加しないものを裏切り者、偽信者と非難するものへと変わっていることに注目したい。

敗北と同じく、勝利もまたアッラーの意思である。その叡智に基づきアッラーは我々を試すことにし、我らの信仰を鍛え、また我々から偽信者を取り除くことにしたのである。それのみならず、アッラーはかつての我々の状況では勝利に際して起こっただろうフィットナ²⁴から

23 「イチケリアへの統合はナリチク作戦の直前に行われた。正確には作戦が準備の最終段階にあった時のことである。それまでに戦闘グループによって規模こそより小さいが成功裏にいくつかの作戦が遂行されていた。ナリチク作戦自体も念入りに計画され準備されたものであった。各グループに経験ある軍事専門家がいた。」

24 フィトナ (fitnah) イスラーム論理の衝突によるイスラーム内の争い。

[論 説]

我々を免れさせたのである。いかなる時でも我々はアッラーの裁可に満足している。

彼が、この汎コーカサス・ジハードへの彼のジャマーアトの参加を正当化するためにフィットナという単語を使用している点は慎重に考慮したい。

ここで、アステミロフは、非常に巧妙なレトリックを使用している。ムスリム共同体では、ムスリムの支持者と不信心者の支持者との分離が起きたと述べ、ロシアを支持するムスリムを裏切り者、偽信徒と認定し、ムジャーヒディーンになるか否かがイスラームとカーフィルに一線を画すと述べている。ムスリムを不信仰者であり、よってカーフィルであると認定するタクフィールの乱用が、フィットナを引き起こす危険を十分承知のうえで、彼はそのフィットナを避けるためには、汎コーカサス・ジハードのもとに真のムスリムは統一されなければならない、そしてそれに参加しないものは裏切り者であると主張する。つまり、汎コーカサス・ジハードに参加するかしないか、の二元論で真のムスリムと偽のムスリムを区分するという、タクフィールを行っているのである。

アステミロフは続けてクルアーンを二つ引用²⁵し、アッラーの敵とムスリムの敵を殲滅せよ、と次のような激しい口調で手紙を締めくくる。

25 「あなたがたがもし損傷を被っても、相手方もまた同様の打撃を受けている。われは人間の間に（種々の運命の）こんな日を交互に授ける。アッラーはこれによって（本当の）信者を知り、あなたがたの中から（真理のための殉教の）実証者をあげられる。アッラーは不義の徒を愛されない。アッラーはこのようにして信仰する者たちを清め、信仰を拒否する者を没落させられる。アッラーが、あなたがたの中奮闘努力する者と、よく耐え忍ぶ者が、誰であるかを知られない間に、あなたがたは樂園に入れると考えるのか。」（イムラーン家章 3:140-142）；「どれ程の預言者が、信心深い多くの敬神な衆と共に戦ったか。かれらはアッラーの道において、遭遇したことに気力を落とさないで、また弱気にもならず屈しなかった。誠にアッラーは耐え忍ぶものを愛でられる。」（イムラーン家章 3:146）

悪魔の僕どもには彼らの罪が罰せられずにおかれると期待させてはならない。誰もアッラーから彼らを守ってはくれないのである。我々はアッラーの敵とムスリムの敵を殲滅するどんな機会も逃さないつもりである。全能のアッラーには我らの手を以て彼らを罰せしめよ。

コーカサス戦線カバルダ・バルカル地区 アミール・セイフッラー

理論家と言われていたアステミロフの手紙に対し、雄弁家と言われていたムコジェフの手紙はさらに扇動的である。ムーサ・ムコジェフは2006年9月23日付けで「ジハードに踏み出して我々は真の自由を得た²⁶。」と題する手紙をカフカス・センターに投稿している。

彼の理論はタウヒード²⁷を守っているのは誰か、という問いから始まる。

アッラーの全ての使徒の任務は、唯一神信仰への呼びかけ（タウヒード）であった。不信心者と異教徒は、しばしば預言者と使徒に対し信仰における譲歩と引き換えにこの世の幸福を申し出た。（中略）今日世界中で我々、はナマーズをし、断食を守り、サダカ（喜捨）とザ

26 «Кабардино-Балкария: На пути к катастрофе. Предпосылки вооруженного выступления в Нальчике 13-14 октября 2005 года» 付録、ムコジェフの手紙 2006年9月23日付「ジハードに踏み出して我々は真の自由を得た。」URL: www.kavkaz-uzel.ru/articles/142989/, 最終閲覧日：2018年11月10日。

27 神が唯一であると信じ、それを表明すること。反意語「シルク」は神が複数であると信じることを意味し、イスラーム最大の罪とされる。竹下政孝「タウヒード」『岩波イスラーム辞典』597-598頁。

[論 説]

カート（シャリーア税）を出す実に多くの人々を見出している。多くの人々がクルアーンを暗記しており、数多くのハディースを知っているが、しかしタウヒードを守っているのはその中のわずかな数の人々である。

彼は、ナマーズ、断食、サダカ、ザカートなどの義務を守り、クルアーンを暗唱しハディースを知っているなどの知識があるだけでは不十分であると主張する。その理由は次のようなものである。

なぜなら彼らは、カーフィルの支配下で生活しており、今日地上にはタウヒードを完全に唱道することを許すような権力が存在しないからである。

彼は、カーフィルの支配下で生活していることがタウヒードに違反している、というレトリックを使う。そして、だからこそ、ジハードは一人ひとりの義務であるという結論に次のように導く。

今日ムスリム一人一人の義務（ファルド・アイン）は、ターゲットに立ち向かい、ムスリムを攻撃するカーフィルと戦うことである。今日ジハードは、ムスリム一人一人の義務（ファルド・アイン）である、なぜならカリフ制の崩壊後、地上のどこかでジハードが繰り広げられなかった時はないからである。そして常にムスリム一人一人の義務であったのは、戦いとアッラーの道で戦っている兄弟への手助けであった。（中略）一部の兄弟は、ジハードをする必要を認めながらも、ファルド・アインとは何なのかを正しく理解していない。大きな思い

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

違いは、彼らが責任を負っていると考える一定の領域と誰かしらの人々に結び付けられているというものである。

ここで言及されているターゲットは、カーフィル（ロシア）に協力的なムスリム為政者を指すものと思われる。そして、敵と戦っている兄弟であるムスリムを助けることは義務であることを思いおこさせ、汎イスラーム・ジハードへの参加は義務であると誘導する。

第一にそのようなジャマーアトは統一を目指していると認めている。しかし一部のムスリムが侵略する敵から身を守り戦っているというのに、同じときに別のムスリムが兄弟を助けるのではなしに平和的ジャマーアトを作り、敵に対していわゆる寛大さを示して見せるとは、いったいどのような統一なのであろうか。

彼は、ここで敵であるロシアに寛大さを見せる平和的ジャマーアトを非難しているのである。

次に彼は、カーフィルの国の法によるとタウヒードを呼びかけることは犯罪であることを以下のように強調する。

（中略）それというもどのカーフィルの国の法によってもこの呼びかけは刑事犯罪だからである。これは立法者としてのアッラーの唯一性の告白に関わるのであり、カーフィルによって「権力打倒への呼びかけと立憲体制への脅威」とみなされている。これはまたカーフィルの法で「宗教間の不和の扇動」と「宗教的優位性の宣伝」と呼ばれる友好と無関心の原則に関わる。そして「平和的ジャマーアト」が中途

[論 説]

半端なイスラームへの、タウヒードと諸原則を欠いたイスラームへの呼びかけを行うことになってしまうのである。これは果たしてアッラーが祝福し言葉をかける預言者が教えたことであろうか。もし一般のムスリムが未だその信条を隠し通せたとしても、宗教指導者はそのような権利など持ち合わせてはいないのである。

2-4. 彼のイスラーム的正当性のレトリックから透けて見えるジレンマ

上述の手紙の背景には、KBJ が世俗政権内での活動を長い間目指したにもかかわらず、違法とされてしまった経緯がある。

次の文章は、アステミロフとムコジェフが地下活動に入った経緯を示している。

今コーカサスで行われているジハードへの態度を問われたとして、ロシアのジャマーアトのアミールは何をなすべきであろうか。もし彼が真実を述べるならば、彼は地下へ潜るか、監獄に留め置かれるか、ジハードへ赴くかのいずれかを迫られる。もし兄弟への無関係を明言するならば、その瞬間彼は、イスラームのリーダーから道に迷ったセクトの首領になってしまう。彼は沈黙してはいられないだろう、なぜなら必ずや彼に従っている人々が、彼らのイマームが何を信じ、どこへ彼らを導いていくか知るのだから。

彼らが当時、地下へ潜るか、監獄にとどめ置かれるか、ジハードへ赴くか、という三つの選択肢しか持っていなかった事がわかる。そして、彼らは、地下へ潜り、ジハードへの参加を決意した。彼は再び、二元論でジ

ハードに参加しないムスリムは不信仰者だと迫る²⁸。そして、彼は自分達の体験を通して自分達の方針が間違っていたことに気づき、方針転換を決意したことを次のように述べる。

我々はこの問題を仲間内のこととして知っているのであり、一面ではその原因をたやすく理解できるのである。しかし別の面では、このテーマについて語ったり書いたりするのは我々にとってそう単純なものではない。なぜならこれらの思い違い全てを我々自身が真実だと考えていたのだし、その信条を変えることは簡単ではなかったからである。我々の罪がどれほど重く、我々が真実からどれほど遠いかを自覚するまでに、多くのことを潜り抜けることになった。

彼らが、平和的な手段を模索していた頃の目的をこう回想している。

我々の目的は、カバルダ・バルカルにおけるイスラームの復興であった。もちろん我々は、コーカサス、エルサレムの解放や、アッラーの言葉を全世界で高く掲げることを夢見たが、しかし何よりもまず、我々が考えていたように「自分たちの人々」へイスラームを訴えかける必要があった。

28 「さあ最後に初歩的で分かり切ったことを自問自答してみよう。今日不信心者の間で暮らし、ジハードに参加しないムスリムの状態とはどのようなものであろうか。答えは単純明快だ。彼はムスリムを助けないのみならず、税を払いその経済を成長させてカーフィルの国家を助けている罪人である。それにもかかわらず彼が自分を正しいと考え、カーフィルの社会に位置を占めようとするなら、それでも彼の不信心を語ることになる。」

〔論 説〕

しかし、彼は、彼らの理想的な「黄金の中庸」が現実的なものではなかったことを悟ったとして次のように説明する。

我々は、カーフィルがムスリムを放ってはおかず、戦争が避けがたいことを知っていた。我々の隣にあるチェチェンで戦争が起きている事実気づかず、ムジャーヒディーンとは関係がないふりをしていることはできなかった。それゆえ我々のところでジャマーアトが作られた時、我々は「黄金の中庸」を選び、平和的な呼びかけとジハードを両立することを決めたのである。実際にはこれは黄金の中庸ではなく、戦争と平和という両立しえないものを両立しようという試みであった。

彼は、ジハードが集団的義務ではなく個人の義務であるという解釈の方針転換を再び述べ、穏健派サラフィー KBJ の終焉をこう告げる。

ジハードに対して、ムスリムの一部だけが果たし、残りは罪を負わない集団的義務として我々が接したことは深刻な過ちであった。今日はもう以前のようなカバルダ・バルカルのジャマーアトは存在していない。カバルダ・バルカルのジャマーアトはアッラーの慈悲のおかげでカーフィルとムナーフィクに対する戦いに踏み出した。

雄弁家であるムコジェフの論調は、理性的なものから大きく外れた扇動的なものへと公然と変化していく。彼は、ジハードへの参加を次のように扇動する。

戦争に必要なのはモスクではなく、剣である。もし今日私が、祈りを

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

ささげるためにモスクに行こうか、あるいはジハードを行おうかと考えている人に会ったならば、まず私はこう彼に言うだろう「戦わなければならない」と。

そして、この方針転換への想定問答を再び繰り広げる²⁹。彼はジハードに参加しないことはもはや罪ではなく、不信仰であると再び扇動する。

ジハードは今日フィクフ（法学的決定）の問題ではなく、アキーダ（宗教的信条）の問題である。一方ではジハードがファルドであると認めるが、恐れのためや俗世の幸福への愛着のためにジハードを行わないという問題がある。また他方ではアッラーが禁じたことをそうではないと考え、アッラーがムスリム各人に義務付けたことをそうではないと考えるという問題がある。これはもはや単なる罪ではなく、カーフィルである。（後略）

ムーサ・ムコジェフ、コーカサス戦線

もはや単なる罪ではなく、カーフィルである、とはどういう意味である

29 「幾人かの兄弟はこのように尋ねる：なぜ我々は以前にこれを聞き知ることがなかったのか、もしや我々のかつての行いは何もかも受け入れられないというのか、ついこの間まで我々のリーダーたちや導師たちは一体であったのに、今日では実にたくさんの異なった意見を耳にしている。今度は誰についていけばいいのか、そしてあなたがたが今回も間違わないという保証はどこにあるのかと。それに対する我々の答えは次のようなものである：我々は真実を理解しなかった、そして理解するやいなやそれに追従し、過ちを犯していた各人が誠実になり、それがアッラーの意思にかなっていれば褒美を得るのである。その条件はただ一つである。それは過ちを認め、罪を悔いることである。我々はアッラーの前で悔い、罪の許しを請い、彼の慈悲を当てにするのである。」

〔論 説〕

うか。ムスリムが間違いを犯した場合、イスラーム法的に彼は直ちに非ムスリムになるのではなく、偽善者、背教者、罪人等になるが、ムスリム共同体のメンバーであることには変わりはない。しかし彼は、もはやジハードに参加しないものはムスリム共同体のメンバーではない不信仰者であるという過激な主張を行っているのである。

この二人の手紙は、穏健派 KBJ の信徒に宛てたグループの急進化についての釈明、説明であると解釈できる。二人は、想定される信徒からの疑問を自ら何度も提起し、それに答えるという手法をとっている。汎コーカサス・ジハードへの参加について、以前の穏健派時代の組織のあり方がそもそも間違っていたのでそれを訂正するのだというレトリックを用いている。そして、両者ともその正当性をイスラームで理論武装し、手紙の後半に向かってジハードへの参加は義務であり、真のムスリムか偽のムスリムかの意思表示がジハードへの参加で示されるという二元論で締めくくる。これは二人の方針転換（解釈の変更）に疑問を持つであろう多くの信徒の為に周到に用意されたプロパガンダであるといえよう。周到に用意されたイスラームの理論武装の隙間から透けて見えるのは、彼らが「黄金の中庸」と呼んだ世俗政権の中での KBJ の存続が不可能になったこと、ムコジェフの手紙の中にある彼らが当時、「地下へ潜るか、監獄にとどめ置かれるか、ジハードへ赴くか」という三つの選択肢しか持っていなかったことである。

3. シャリーアト・ジャマーアト

2000 年代半ばまでにシャリーアト・ジャマーアトの前身である半自治的な急進的グループの地下組織「ジャンネット」‘Jannet’（のちにシャリー

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

アト・ジャマーアトに改名) が創設された。指導者はラスル・マカシャリポフ(またの名をアミール・ムスリムまたはマハチカラのアミール)である [Kurbanov 2008: 156-157]。マカシャリポフはバサエフらのダゲスタン侵攻の際のアヴェール語通訳の経験者だった。マカシャリポフとイドリス・バクノフは、地下組織を発達させ、マハチカラ、ブイナクスク、ハサヴェユルト、キズリヤールの別々の武装ジャマーアトとの共闘に貢献した。結果としてダゲスタン南部に武装勢力の影響力が浸透した。

結果として 2003-2005 年には、サラフィー主義者への弾圧行為に関わる警察官に対して、青年ジャマーアトによる武装攻撃が行われるようになった。武装勢力は、町を細かい地区に分け、それぞれの地区にアミールを配置した。2005 年のマスハドフの死の後、ダゲスタンのジャマーアトは、新しい汎コーカサス・ジハードの指導者としてアブドゥル・ハリム・サイドゥラエフに忠誠を誓い、KBJ ら他の青年ジャマーアトと連携を深めていく。

3-1. 穏健派からの転向？ ヤシン・ラスロフは穏健派サラフィーだったのか

2005 年春シャリーアト・ジャマーアトの報道部が設立された。マカシャリポフは、ヤシン・ラスロフを報道担当者のアミールに指名した。ヤシン・ラスロフは、若いムスリム達のリーダーであり、穏健なイスラーム復興を支持しており、広義なサラフィー運動からは距離を置いていたとされている。しかし、ラスロフは評価の分かれる人物である。クルバノフ [Kurbanov 2008: 160] によると、周囲はラスロフの緩やかな急進化を見守った。しかし、ラスロフの急進化の過程についての詳細は不明な点が多い。急進化したということは、彼が当初穏健派であったことを前提とす

[論 説]

る。以下、ラスロフの思想の変遷を分析する。

ラスロフが報道部の責任者であった時に、ジャマーアトのレトリックは急進化した。シャリーアト・ジャマーアトの初期の宣言が市民に対する暴力を否定したのに対し、ラスロフは敵の子供や他の家族のメンバーへの攻撃を正当化する傾向があった。

彼はロシアにこう警告している。

いわゆる特殊部隊が犯した重大な罪である侵入と弾圧が見過ごされる
と考えないように。もしあなたたちが無傷で逃げることに成功したと
しても、あなたたちの妻たちや子供たちが無事だと思わないように³⁰。

市民を傷つけてはいけないという宣言をしたマカシャリポフとは対照的に、ラスロフは一般市民である敵の家族への攻撃を正当化している。最終的には、KBJらと汎コーカサス・ジハードで連携している。彼がカーフィルであるロシアと、ムナーフィクであるムスリムを区別し、双方への闘争を宣言している点、汎コーカサス・ジハードを正当化している点はKBJと同様である。例えば、後述するラスロフが執筆した論文には、対ロシアのジハードとは、権力を不信仰者（カーフィル）から神のために取り除き、イスラーム国家を建設するためと記述されている³¹。また、ビデオメッセージを元に彼の死後カフカス・センターが発表した追悼記事では、

30 ДЖАМААТ «Шариат»: «Моджахеды будут направлены в Москву» (2005年7月2日「シャリーアト・ジャマーアト：ムジャーヒディーンがモスクワに送られるであろう。」) URL: www.kavkazcenter.com/russ/content/2005/07/02/35721/dzhamaat-shariat-modzhakhedy-budut-napravleny-v-moskvu.shtml 最終閲覧日：2018年11月10日。

31 «Джихад на Северном Кавказе: сторонники и противники» URL: <http://www.kavkazcenter.com/russ/content/2006/11/12/48277/yasin-rasulov-dzhikhad-na-severnom-kavkaze.shtml> 最終閲覧日：2018年11月10日。

青年ジャマアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

いわゆる「聖職者（筆者注：ムスリム聖職者）」をムナーフィクと呼び、ムナーフィクがカーフィルと共に、ラスロフを恐れていたと記述している³²。記事のタイトルは「ダゲスタンのジハードは続く³³」である。ムナーフィクであるムスリムへの攻撃もジハードとみなしていたのである。しかし研究者の中には彼が急進的な思想の持主ではなかったと主張している者もある³⁴。3-2. 以降では、彼がなぜ急進化したか？ではなく、彼は本当に穏健派だったのか？について、穏健派サラフィーであったとされる彼が考えるイスラーム主義思想の特徴に焦点をあて分析したい。

3-2. ラスロフの略歴

彼の人生の略歴³⁵は以下のようなものである。1975年2月7日にダゲスタン・マハチカラに生まれる。マハチカラのイスラーム学校でイスラーム教育を受けるとともに、ダゲスタン国立大学外国語学部を卒業した。アラビア語とフランス語に堪能で、ロシア科学アカデミー・ダゲスタン科学センター³⁶にてアラビア語通訳を学ぶ。また、クルバノフ [2008: 160]によると、ダゲスタン国立大学大学院で宗教学を専攻し、「如何に異なるイスラーム学派の間のギャップを埋めるのか」という論文を書いて卒業する。彼の急進化が明らかになる2005年までの間に若手イスラーム指導者としてモスクワも含む数多くのイスラーム系イベントに参加し、若手イスラーム

32 “Jihad Continues in Dagestan” URL: www.kavkazcenter.com/eng/content/2007/01/07/7085_print.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日。

33 脚注32参照。

34 たとえば、クルバノフ [Kurbanov 2008: 160] は彼を穏健派イスラーム復興主義者とよんでいる。

35 以下の記事に基づく «Расулов Махач (Ясин) Магомедрасулович» URL: www.kavkaz-uzel.ru/articles/92789/, 閲覧日：2018年11月10日。

36 Дагестанский научный центр (ДНЦ)

ム知識人として有名になる。ダゲスタン科学センター東洋学部大学院に在籍するが退学となる。時期は不明であるが、「北コーカサスにおけるジハード」について論文を発表する。ダゲスタンのテレビ局で働いていた。2005年春ジャマアートの報道部が設立され、マカシャリポフはヤシン・ラスロフを報道担当者のアミールに指名した。そして2005年だけでラスロフは少なくとも8つの武装攻撃に関係したとされている。2006年に警察からの銃撃により、死亡。彼の正確な死亡日については諸説ある。個人のブログに掲載されている彼の略歴によると、彼の死亡日は2006年4月10日、マハチカラで警察との銃撃戦による³⁷。クルバノフ [2008: 164] によると、2006年8月10日、警察に撃たれて死亡。ロシア国営第一放送は2006年4月10日に死亡と報道³⁸。カフカス・センターには8月18日に訃報記事³⁹が掲載されているので、8月以前である事は間違いない。

彼の略歴からは次のようなことがわかる。ダゲスタン国立大学在学中(1992-1996年頃と推測)に第一次チェチェン紛争(1994-1996年)が始まった。サウジアラビア等への海外留学経験はなく、イスラーム教育はダゲスタンのイスラーム学校⁴⁰で受けた。ダゲスタン国立大学大学院に学部卒業後そのまま進学した(1996-98年頃と推測)と仮定すると戦間期に宗教学を専攻し、1998年頃に「如何に異なるイスラーム学派の間のギャッ

37 脚注35参照。

38 «В Дагестане уничтожен один из лидеров экстремистов - Махач Расулов, известный под кличкой Ясин» URL: www.ltv.ru/news/other/82834, 現在閲覧不可。最終閲覧日: 2016年1月27日。

39 «Аллах забирает лучших из мусульман...» URL: www.kavkazcenter.com/russ/content/2006/08/18/46574.shtml, 現在閲覧不可。最終閲覧日: 2016年1月27日。

40 カフカス・センターの追悼記事にはイスラーム大学と記述してある。"Jihad Continues in Dagestan" www.kavkazcenter.com/eng/content/2007/01/07/7085_print.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日 2014年2月9日。

青年ジャマーアトの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

プを埋めるのか」という修士論文を執筆したと推測される。第二次チェチェン紛争（1999–2007年）の開始前後に重なる時期と推測される。アラビア語に堪能だったので、卒業後も独学でアラビア語文献（またはサイト）から学ぶことが可能だった。数多くのファトワー⁴¹を翻訳している。ダゲスタンのテレビ局勤務が後のシャリーアト・ジャマーアト報道官への抜擢につながったと推測される。2005年に報道官になると同時に多くの武装攻撃に関係している。

以下、穏健派サラフィーとされるラスロフの思想を彼が2004年から死亡した2006年の間に執筆した⁴²と思われる論文⁴³「北カフカスにおけるジ

41 2007年1月7日のカフカス・センターの追悼記事では、彼がユースフ・カラダーウィーのファトワーを翻訳したと記述している。”Jihad Continues in Dagestan” URL: www.kavkazcenter.com/eng/content/2007/01/07/7085_print.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日。

42 シャリーアト・ジャマーアトの公式HPは現在存在せず、彼の論文はいろいろなサイトに転載、削除されているので初出がいつかは不明である。しかし、論文本文中にある「チェチェン紛争からすでに10年経ち」という一文から、2004年から彼が死亡した2006年の間に書かれたものと推測される。筆者が初めて閲覧したサイト「Джихад на Северном Кавказе: сторонники и противники» (URL: www.au-l.narod.ru/Yasin_Rasulov_Jihad_naSevernom_Kavkaze.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日。)には、書かれていなかった「ヤシン・ラスロフ、シャーヒード(殉教)」という言葉が他のサイトには加えられている。例えば、URL: www.kavkazjihad.com/ru/stati/analitika-tribuna/yasin-r%D0%B0sul%D0%BEvdzhikh%D0%B0d-n%D0%B0-s%D0%B5v%D0%B5rn%D0%BE-m-k%D0%B0vk%D0%B0z%D0%B5-st%D0%BEr%D0%BE-niki-i-pr%D0%BETivniki.html 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日（ジハード主義者のサイト）、«Ясин Расулов: Джихад на Северном Кавказе» URL: www.kavkazcenter.com/russ/content/2006/11/12/48277/yasin-rasulov-dzhikhad-na-severnom-kavkaze.shtml（カフカス・センターのサイト）等。最終閲覧日：2018年11月10日。

43 この論文はいくつものサイトに転載されており初出がいつどこであるかは不明であるが、筆者は2014年2月にダウンロードしたもの（脚注44）を使用している。これは、この論文が学術論文の方式をとっており多数の引用や注が掲載されており、よりオリジナルに近いと推測されるためである。現在閲覧可能なものを

ハード⁴⁴」にみられる彼のイスラーム思想の特徴を考察する。なお、論文は三部構成になっており、I. 帝政期、II. ソ連期、III. 近現代、で構成されている。

以下、特徴を挙げる。

- ① チェチェン紛争を18世紀から続くカフカス戦争の延長と位置付ける。「ソ連後の領土問題を発端とするチェチェン紛争は18世紀のロシアによる北コーカサスの占領によるカフカス戦争の延長であるということを明確にする必要がある。」
- ② シャイフ・マンスールとガーズイー・ムハンマドの戦いを反植民地運動であり、彼らがワッハービズム、サラフィズム、ジハーディズムの影響を受けていたと説明。「アブドゥル・ワッハーブの反植民地運動がイスラーム世界に広がるとともに、ワッハービズムは18世紀のダゲスタンに広がった。・・・ダゲスタンの初代イマーム、ガーズイー・ムハンマドが、サラフィズム思想と反植民地運動としてのジハードに影響されていたのは明らかであり、ガーズイー・ムハンマドとマンスールは、アブドゥル・ワッハーブのサラフィズムとジハーディズムに触発されていた。・・・ガーズイー・ムハンマドは、サラフィー主義者であるサリフ・アル・ヤーマーニーの弟子であり、ダゲスタンをロシア権力へのジハードへ導いた。」
- ③ 大ジハード⁴⁵だけでは不十分である。「・・・北コーカサスではジハー

以下に示す。「История Джихада на Кавказе в вопросах и ответах» URL: www.kavkazcenter.com/russ/content/2006/10/31/48011/istoriya-dzhikhada-na-kavkaze-v-voprosakh-i-otvetakh.shtml, 最終閲覧日：2018年11月10日。

44 «Джихад на Северном Кавказе: сторонники и противники» URL: www.au-l.narod.ru/Yasin_Rasulov_Jihad_naSevernom_Kavkaze.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日。

45 自己の信仰を深める個人の内的努力を大ジハード、武器をとる戦いを小ジハードという。

ドにおける内面の戦いだけに焦点が当てられていた。スーフイズムの教え、特にダゲスタンのタリーカのジハードのイデオロギーは十分ではない。」

④ 彼はアーダート、タリーカ⁴⁶を否定し、論文の最後にガーズイー・ムハンマドの教えを添付。アーダート、タリーカがあるから混乱が生じると主張している。

⑤ 世俗政権を次のように否定している。「タウヒードについていうなら、ムスリムは創造者が創った法（筆者注：シャリーア）以外の法（筆者注：人定法つまりロシア法とそれに基づく政権）に従うべきではない。ムスリムが神の法に基づいて生活しないなら、その者は多神教徒である。」「政治と信仰の分離はイスラームには存在しない。それは、『神のものは神に、カエサルのもはカエサルに』というキリスト教徒の教えの借り物である⁴⁷。」

この論文から読み取れるのは次のような点である。ラスロフは、反植民地運動としてのワッハービズムをサラフィズムと同意語として扱い、反植民地運動としての18世紀からのカフカス戦争をサラフィーが存在した根拠とし、このカフカス戦争をロシアへのジハードと位置づけている。そして、サラフィズムは18世紀からカフカスに存在したのであるから、スーフイズムが伝統的であり、サラフィズムが外来であるという分類は無意味だと指摘。また、アーダート、タリーカ等の伝統を否定する根拠として、最後にガーズイー・ムハンマドの教えとして長文を引用している⁴⁸。この論文を読む限り、彼はロシア法に基づく世俗政権を認めず、18世紀から続

46 キリスト教の教団とは異なり複数のタリーカに所属することが可能である。

47 «Джихад на Северном Кавказе: сторонники и противники» URL: www.au-l.narod.ru/Yasin_Rasulov_Jihad_naSevernom_Kavkaze.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日。2015年12月。

48 最後に原文のコピーと書いてあるが、ガーズイー・ムハンマドの何の原文なのかは不明。

くジハードを行うべきと主張するジハード主義者である。

3-3. 穏健派としてのラスロフの人物像は適当なのか

ヤシン・ラスロフは、ダゲスタンの週刊誌『Novoe delo』の宗教セクションの主要な寄稿者であり、自身のウェブサイト www.yaseen.ru⁴⁹ を所有していた。しかし、シャリーアト・ジャマーアトのウェブサイト⁵⁰、彼自身が所有していたウェブサイトはともに閉鎖されており、一次文献としての彼の言説を検証することは難しい。上述の論文にもかかわらず、彼が穏健派イスラーム改革主義者であった⁵¹ という主張が存在するのはなぜか。ジハード推奨の論文を書き、2005年の武装攻撃に至る過程に何があったのであろうか。

2004年4月16日付で、ラスロフは、「Chernovik (草稿)」というサイトの中の「検閲なしの⁵² 草稿」というコーナーに「なぜ彼らが警官を襲撃するのか」という文章を寄稿している⁵³。記事の中で彼は、「内務省への戦争を宣言した個人、またはグループがワッハービズムの支持者または宗教的な急進主義者であるのは明白である」と述べている。また彼は同記事で、その契機を1999年9月に議会で採決されたダゲスタン共和国における

49 2009年で更新が止まっている。現在トップページのみ表示され、記事は閲覧不可。

50 彼の企画であるが、彼の死後2007年に開設されたサイト。

51 筆者の知人が2014年にダゲスタン科学アカデミーを訪れた際も、「ラスロフはガチガチの急進派ではなかった。とても話の分かる、優秀な人間だった。本当に惜しい人材を亡くした。」とラスロフを知っていた人が語ったという。(ラスロフはダゲスタン科学アカデミーに所属していた。)

52 «Без купюр».

53 «Почему убивают милиционеров в Дагестане?» URL: www.chernovik.net/content/politika/pochemu-ubivayut-milicionerov-v-dagestane-0, 最終閲覧日: 2018年11月10日。

青年ジャマアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

ワッハービズムと他の急進主義的活動を禁止する法律であるとも述べている。彼は、これを事実上の「魔女狩り」であり「良心と信教の自由が完全に排除された」と糾弾している。

この記事の中で彼は法的観点から二つの点を批判している。一つ目は「ワッハービズムとは何か」という「明白で不明瞭なところのない」定義がないまま法が施行されている点である。二つ目は「法の適用の範囲と方法」が警官個人の裁量に任されている点である。そしてこのワッハービズムを禁止する法律が警官への復讐を招いているのだと締めくくり、警官が襲撃される理由として次の4つの点を挙げている。①信仰を理由に迫害する権限を与える不公平で無責任な法。②宗務局に何が「真のイスラーム」で何が「真のイスラームでないか」を区別する無制限の権限を与えたこと。これによって、宗務局またはシェイフ・サイド・アフアンディに敵対するものは自動的にワッハービ主義者になった。③内務省と検事局が信仰を理由とする迫害に関与していること。④ワッハービ主義者の嫌疑をかけられた拘束者に対して警察が行っている残虐な拷問と暴力である。

この記事の中でラスロフが強調している点は、そもそもこの1999年に採決された法に欠陥があるという点である。既述のジハードについての論文で彼が主張している「伝統的イスラーム」と「非伝統的イスラーム」を分けるのは無意味である、という論調や後述する法的多元主義に答えを探すにいたる彼の思想が、この1999年の法に欠陥があるという主張から発展されたものだとこの記事から推測できる。この記事が投稿された直後の2004年5月14日に同じサイトにラスロフは「そして裁くのは誰か？」という記事⁵⁴を投稿し、宗務局から4月16日の記事に反論があったことを

54 «А судьи кто?» URL:www.chernovik.net/content/respublika/sudi-kto 最終閲覧日：2018年11月10日。

伝えている。

ラスロフのサイトが閉鎖されたのと同じ2009年に開設されたサイト「kavkaz.pres.-ru: 紛争とテロリズム。開発。事実。分析」⁵⁵に引用されているラスロフの言葉に彼の葛藤を垣間見ることができるかもしれない。彼はこう述べている。

我々が話しているのは法的多元主義である。それは二つまたはそれ以上の法律システムが同じ社会に共存することであり、この場合それはシャリーアとロシアの法である。

同記事によると、ラスロフは、1927年まで認められていたシャリーア法廷を指し、ソ連初期にダゲスタンに法的多元主義が存在したと言及している。しかし、記事によるとラスロフはそのソ連期の多元主義が一時的なものであり、シャリーアの廃絶を目的とするものであったと主張している。現代については、以下のように述べている。

シャリーア制度を北コーカサスに普及させるという思想は、宗教的文化的なムスリムのアイデンティティに起因する紛争の可能性を減らすことを目的とする。

55 «Раппани Халилов. Ясин Расулов.» URL: www.kavkazpress.ru/archives/7061, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2016年1月27日。北コーカサスのニュースをそれぞれの民族共和国ごとに分けて閲覧できるサイト。多数の人が投稿するブログ形式をとっている。武装派をテロリストと非難している点や男尊女卑の慣習を非難している点から、自身を革新的イスラーム主義者と考える人が集まるサイトだと思われる。

青年ジャマーアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

同記事によると、ラスロフは「北コーカサスにおける武力紛争は政権の全体主義的手法では決して解決できず、したがって和解と安定のための他の手段を探す必要がある。」と信じていた。これらのラスロフの言葉は、上述の2004年にラスロフが投稿した「そして誰が裁くのか？」という記事からの引用であると思われる。彼は2004年の記事⁵⁶の中で次のように述べている。

われわれは理性的で実践的な21世紀に生きており、科学的な根拠のあるものだけを受け入れる。

3-4. ラスロフの考えた法的多元主義とアーダート

ラスロフはアーダート、タリーカを否定しているが、アーダート、タリーカ等を現代にそぐわない古い慣習とみなしていたのかもしれない。そして、この21世紀の科学的根拠を求める姿勢が、法的多元性の主張にもみられる。彼は2004年の同じ記事で以下のように述べている。

こんにちこの問題を解決するためには、完全に新たな、民主的な、そして文明的な方法が要求される。ロシア人の研究者達、例えばシュキヤイネン、ツイプコ、アルチュノフは、北コーカサスの武力紛争は既存のロシアの立法の中にシャリーア制度、またはシャリーア法廷の運営が必須であるジャマーアト連合の設立を導入することになるであろうと信じている。これは、法的多元主義つまり二つかそれ以上の法制度が社会領域に共存することを原則とする。この場合これはシャリーアとロシアの法律である。

56 脚注 54 参照。

〔論 説〕

ここで初めて、大学院で「如何に異なるイスラーム学派の間のギャップを埋めるのか」という論文を執筆し、アラビア語に堪能でファトワーや他のイスラームの学術書を翻訳していたという [Kurbanov 2008: 160]、彼の姿とのつながりが見られる。イスラーム学校に通い、ダゲスタン国立大学在学中にチェチェン紛争を経験した彼の関心の出発点は「いかに北コーカサスに和解と安定をもたらすか」であったのではないか。実際彼は 2004 年の記事をこう締めくくっている。

こんにち、北コーカサスにシャリーアを導入するという考えはムスリム間の文化的アイデンティティや信仰上の理由による紛争を減らすことを目的とする。⁵⁷

ラスロフは、イスラーム学派間のギャップとそれに起因する紛争が起りやすい土壌を熟知していた故に、「北コーカサスの宗教的文化的なムスリムのアイデンティティに起因する紛争の可能性を減らすため」にはシャリーアの導入しかないという考えに至ったと分析できる。そして、彼は、シャリーアとロシアの法律の共存はこんにちの世界では科学的に合理的な考えであると、ロシア人研究者らの影響をうけながら考えるようになったと思われる。しかし、彼の理想とする法的多元主義は北コーカサス全域で正式に導入されるには至らなかった⁵⁸。その後、彼は法的共存を諦めジハードについての論文では世俗政権を完全否定するにいたる。果たしてラスロフは本当に穏健派であったのだろうか。その解釈が分かれる理由は本

57 脚注 54 参照。

58 後述するが、ダゲスタン等の一部北コーカサスではシャリーアの施行について事実上の法的多元主義状態になっているが、これは正式な法的多元主義というよりもロシア法の及ばない地域があるともいえる状態である。

青年ジャマーアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

稿 3-2. の最後で既述しているように、論文「北カフカスにおけるジハード」に見られるラスロフの思想の特徴「④アードート、タリーカ⁵⁹を否定し、論文の最後にガーズイー・ムハンマドの教えを添付。アードート、タリーカがあるから混乱が生じると主張している。」にあるかもしれない。

4. ラスロフの理想とする法的多元主義の形態

ラスロフは、論文「北カフカスにおけるジハード」の最後にガーズイー・ムハンマドの教えを添付している。その教えは次のようなものである。

昨今人々は、伝統的なアードートによって裁かれ、アードートを宗教の基本原則と同列に並べ、無意識にアードートをクルアーンやスンナの上位に据えている。(中略) これは神の目には明白な不信仰(カーフィル)である⁶⁰。

ここから、ラスロフの理想とする法的多元主義はシャリーアとアードートを明確に区別し、アードートを厳格に排除するものであったと予想できる。ラスロフの理想は現実的であったであろうか。以下で考察していきたい。

4-1. 研究者の間でも変化する北コーカサスにける法的多元主義の評価

ラスロフはなぜ穏健派と言われるのか。北コーカサスの歴史をかんがみれば、法的多元主義は実践的方法として取り入れられてきた過去がある。

59 キリスト教の教団とは異なり複数のタリーカに所属することが可能である。

60 «Джихад на Северном Кавказе: сторонники и противники» (URL: www.au-l.narod.ru/Yasin_Rasulov_Jihad_naSevernom_Kavkaze.html, 現在閲覧不可。最終閲覧日：2014年2月9日。)

〔論 説〕

特に北コーカサスでは他の地域と違い、シャリーアは刑法の範囲にも及んだ。必ずしも非現実的であったとは言えないかもしれない。

ラスロフは本当に非現実的であったのか？これが、彼が穏健派であるか否かの解釈がわかる理由であろう。彼の考える中庸と法的多元主義は場所と時代によっては必ずしも非現実的とは言えない。実際、ラスロフは、上述したように法的多元主義の根拠としてロシア人の研究者を列挙している。しかしボブロボニコフ [2015: 55] によれば、北コーカサスの法的多元主義を考える上で、専門家の間でも地域における革命前とりわけ 18 世紀から 1860 年代前後の法的状況を絶対視するという間違いがあった。ボブロボニコフは、150 年を経て今も同じことが言えるだろうかと疑問を投げかけ、シャリーアやアーダートに対する評価は一定しないとし、さらにソ連時代は研究者の中でシャリーア、アーダートはすべて否定的に解釈されていたが、ソ連後は一転して肯定的に解釈され出したと指摘している [Бобровников 2015: 64]。つまり、研究者の間でも法的多元主義に対する考えは変化しているのである。ラスロフは肯定的な研究を参考にしたのであろう。

北コーカサスにおける法的多元主義の評価の複雑さの要因の一つは、時代によってまた地域によって多元主義の評価が異なっただけではない。法源がロシア法とイスラーム法の二つというシンプルなものではないからである。ラスロフがガズイー・ムハンマドを引用しているように、北コーカサスには 17 世紀から続くシャリーアが上か、慣習法アーダートが上かという論争が存在する。ケンパー [Kemper 2002: 265-278] によると、17,18 世紀から始まる「シャリーアがアーダートに優越する」のかという論争は 19 世紀のシャミーリらのジハードの呼びかけにより新しい段階に入る。注目すべき点は、この論争がジハードが不信心者のみならず、ムスリム

青年ジャマアートの思想の変遷：急進化の過程におけるイスラーム法的正当性の主張を中心に

にも向けられるべきか、及びヒジラをするべきか、という論争にまで発展する点である。つまり、法的多元主義を取り入れるか否かではなく、そもそも何を法源として認めるか、という点からムスリム間の論争が起こってしまうのである。モザイク状に分布する民族とハナフィー、シャーフィイーという二つの学派の存在がある上に法源を巡ってもムスリム間の論争が起きやすい土壌が存在するのである。

4-2. 18世紀から続くシャリーア、慣習法、ロシア法の共存と対立と現在

旧ソ連圏の他のイスラーム地域と同様に北コーカサスにも18世紀から続く、フィクフ⁶¹(シャリーア、ハディース、イジュマー)、マスラハ⁶²(慣習法、アーダート)と人定法(ロシア法)の混在と競合の歴史が存在する。帝政期からの長いロシア法の浸透の歴史の中で、時期によって、また地域によってロシア法とイスラーム法と慣習法の混在のあり方は大きく異なる。北コーカサスと他イスラーム地域の違いは、法的多元主義の歴史の中で刑法にもシャリーアが取り入れられた点であろう。現在の北コーカサスでシャリーアが広く適用されている分野は、食品、酒の売買、結婚契約、シャリーア法廷の設置について、である [Ярлыкапов 2015: 60]。しかし、シャリーアの有効性は地域によって差異がある。ヤルルカポフ [2015: 61] によるとコーカサス東部のチェチェン、イングーシ、ダゲスタンではシャリーアの存在感が増大しており、事実上の法的多元主義状態となっている。特に20-30代の若者を中心とした集団がシャリーア・ガードを構成し、①屋外での秩序維持、②シャリーアの決定の遵守、③

61 イスラーム法の法源であり、法的拘束力をもつもの。これに対し、マスラハは法的拘束力をもたない。

62 マスラハの文字通りの意味は利益であるが、イスラーム法学のうえでは公共の利益、つまり社会福祉を意味する。

[論 説]

シャリーア決定の機能の維持と同時にロシアの世俗法廷も維持する、という役割を担っている。しかし、西部のアディゲ、チェルケスではロシア法が優越している状態である。今後、北コーカサス全体にシャリーアの影響力は広まり、事実上の法的多元主義状態は北コーカサス全体に広がるのであろうか。

ヤルルカポフは興味深い回答をしている。シャリーアが、実際には過激派集団のイデオロギーとして使われているのは確かなので、若者と宗教エリートの中ではシャリーアを制限したいという願望はあるが、実際には彼ら自身もシャリーアとアーダートの区別がつかないのだという [Ярлыкапов 2015: 62-63, 68]。これでは厳格なシャリーアの施行も排除も難しいのが現状であろう。

東部の事実上の法的多元主義はラスロフの目指した法的多元主義であろうか。現在のダゲスタンの状況を考えれば、少なくともその法的多元主義はダゲスタンの紛争解決の手段になっているとは言えないようである。ムスリム間の紛争解決の手段としての法的多元主義は少なくとも現在の北コーカサスでは非現実的であったのかもしれない。

穏健派サラフィーと呼ばれた青年ジャマーアトが宗務局と対立した最大の原因の一つはアーダート、タリーカ等の伝統的慣習法の影響を認めないことにあった。にもかかわらず、彼ら自身がシャリーアとアーダートを明確に区分することがそもそも非現実的であったともいえよう。

4-3. 今後の課題としてのダール・アッ＝スルフ

ハナフィーが世界をダール・アル＝イスラームとダール・アル＝ハルブの二元論で分けているのに対し、シャーフイイ学派⁶³では第三の世界観

63 スンナ派には四大法学派が存在する。ハナフィー、マーリク、シャーフイ

としてダール・アッ＝スルフという概念がある。これはムスリム地域とロシアの関係をどう解釈するかにとって非常に重要な考えである。二元論では、イスラームの実践ができていれば、そしてムスリムが排外されていないければそこはダール・アル＝イスラームであると認識することができる。逆にいうと判断する要件がその二つだけともいえる。しかし、ダール・アッ＝スルフは国際関係でいうところの休戦条約を結んでいる状態に近い。つまり、和平はもろくも崩れ去る可能性が高いのである

このダール・アッ＝スルフに注目する理由は二つある。一つめはジハード及びヒジラするべきか、という言説の中でその状況においてジハードやヒジラはファルド（義務）か、という点が争点となるからである。ファルドとはイスラーム法の遵守を意味する。二つ目はジハード及びヒジラをするべきか、というイスラーム法的根拠として、ムスリムの居住地域がダール・アル＝イスラームかダール・アル＝ハルブか、という法的解釈が争点となるからである。ダール・アッ＝スルフを北コーカサスの文脈で語るとロシアをダール・アル＝イスラームであるか否か判断しなくても、非イスラーム国家であるロシアと和平条約を結んだ状態と解釈することも可能になるのである。この場合のダールは脚注6にもあるように、自立的な世界

イー、ハンバル学派である。その中で「不信者」（筆者注：カーフィル）の定義についてのハナフィー学派とシャーフイー学派の違いに関するエピソードを紹介したい。ハンバル学派の開祖であるイブン・ハンバルが師であるシャーフイーと袂を分かつきっかけは、「礼拝を全くしない者は不信者である。」というハディースの中の、「不信者」の解釈の差異である。ハンバルはこのハディースを根拠に礼拝をしないと文字通りの不信仰に陥ると解釈したが、シャーフイーはハンバルとの会話にて、「その者は、信仰告白をしてすでにムスリムとなっているのに、いかにして再びムスリムでなくなることができるのか（矛盾するではないか）」と異なる解釈を示した。そのためシャーフイーは、信仰はあっても不信者であるという奇妙な範疇が生じるため、「不信者」を大いなる罪人の意味に解した。小杉泰 1999 年『イスラームとは何か』第八刷東京：講談社、163 頁。

〔論 説〕

や地域を指すが必ずしも厳密な領域国家を意味しない。しかし、同時に高度な自治を要求する解釈にもつながり得るであろう。ラスロフにとっての法的多元主義とは、ロシアからの完全な独立を目指すのではなく、ロシアの中に複数の法の支配を共存させることにより、あるいは独立紛争を回避する手段だったのかもしれない。北コーカサスにおける青年ジャマーアトを中心とするイスラーム法の解釈も、研究者の解釈も変化している。今後の北コーカサス地方にける青年ジャマーアトを中心とした急進的イスラーム主義思想を理解するためにイスラーム法の研究を深めることが重要な課題である。その課題の中にダール・アッ＝スルフという概念も含めていきたい。

5. 結びにかえて

本稿ではKBJ、シャリーアト・ジャマーアトという当初穏健派と言われた二つの青年ジャマーアトのイデオログ達がいかに武装闘争の正当性にイスラーム法を根拠として使っているのか分析を試みた。明らかになったのは、KBJ、シャリーアト・ジャマーアトともに敵をカーフィルであるロシアとムスリム内の敵に区分し、対ロシアと対ターゲット、ムナーフィクという二つの敵と戦っていることである。ムスリムに自分たちのジハードに参加するよう呼びかけ、ムスリムをムジャーヒディーンとターゲット、ムナーフィクに区分し、ムスリム間での武装闘争をもイスラーム法を根拠に正当化し、ムスリムに対してもジハードを宣言しているのである。特に注目したいのは彼らがいとも簡単にイスラーム法の解釈を変更している点である。そして、このイスラーム法の解釈を巡る論争と闘争は18世紀から続くシャリーアが上かアーダートが上かという論争を背景に断続的

にはあるが続いているものなのである。

ラスロフは果たして穏健派であったのであろうか。その解釈には北コーカサス地方の法的多元主義の歴史と時代によって政権や研究者のシャリーア、アードルトへの評価が変化している点も考慮する必要がある。彼が穏健派であったか否か解釈が分かれるのはそのためである。現時点で言えるのは、現在のダゲスタンでの事実上の法的多元主義は少なくともダゲスタンの紛争を減らす解決策となっただけではないということである。現在の事実上の法的多元主義が紛争解決の手段としてそれほど機能していない理由は、①北コーカサスにモザイク状に分布する多数の民族と、②二つのイスラーム学派と、③18世紀から続くシャリーアが上かアードルトが上かという論争の歴史、にある。これらは、ムスリム間で潜在的に分断する無数の対立軸の存在を意味する。実際に北コーカサス内でもシャリーアの影響力に大きな濃淡がある。つまり、①②③が同時に存在することによってムスリム内での論争と紛争を引き起こしやすい土壌となっているのである。このムスリム内での論争と紛争がイスラーム法の解釈を安定させず、対ロシアとの関係を安定化できない要因と考えることもできる。ムスリム間の見解の一致を得る試みが新たな紛争を引き起こすのである。

北コーカサスの急進的イスラーム思想を分析する為には、今後の課題として北コーカサスにおけるイスラーム法の解釈を巡る論争の歴史の研究とともに今後より深いイスラーム法の知識が求められるであろう。また、彼らが対カーフィルと対ムスリムに対しては異なったイスラーム法的根拠で武装闘争を正当化している点も注意したい。

参考文献

〈日本語〉

- 大塚和夫、小杉泰、小松久男、東長靖、羽田正、山内昌之 2009『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。
- 小杉泰 1999『イスラームとは何か』東京：講談社。
- 小松久男、宇山智彦、堀川徹、梅村坦、帯谷知可 2005『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社。
- 宗教法入日本ムスリム協会 2009『日亜対訳・注解 聖クルアーン』東京：宗教法入日本ムスリム協会。

〈英語〉

- Hunter, Shireen; Thomas, Jeffrey L. and Melikshvili, Alexander. (eds.). 2004. *Islam in Russia: the politics of identity and security*, Armonk, NY: M.E.Sharpe, Inc.
- Kemper, Michael. 2002. "The Dagestani legal discourse on the Imamate," *Central Asian Survey* 21, no.3, pp.265-278.
- Kurbanov, Ruslan. 2008. "The information Jihad of 'Shariat' jamaat," Dannreuther, Roland. and March, Luke. (eds.). *Russia and Islam: State, Society and Radicalism*, London and New York: Routledge, pp.155-174.
- Makarov, Dmitry. 2005. "Dagestan's approach to the Islamic Mega-Area?," *Emerging Meso-Areas in the Former Socialist Countries: Histories Revived or Improved?* Sapporo, Slavic Research Center, pp.195-220.
- Radnitz, Scott. 2006. "Look who's talking! Islamic discourse in the Chechen wars," *Nationalities Papers* 34, no.2, pp.237-256.
- Sagramoso, Domitilla. and Yemelianova, Galina. 2010. "Islam and ethno-nationalism in the north-wester Caucasus", Yemelianova, Galina. (eds.). *Radical Islam in the former Soviet Union*, Oxford and New York: Routledge, pp.112-146.
- Shterin, Marat. and Yarlykapov, Akhmet. 2011. "Reconsidering Radicalisation and Terrorism: the New Muslims Movement in Kabardino-Balkaria and its Path to Violence," *Religion, State and Society* 39, no.2-3, pp.303-325.
- Yarlykapov, Akhmet. 2008. "The radicalization of North Caucasian Muslims," Dannreuther, Roland. and March, Luke. (eds.). *Russia and Islam: State, Society and Radicalism*, London and New York: Routledge, pp.137-154.

〈ロシア語〉

- Бобровников, В. 2015. «Мусульманскиетрадиции, правообществона Российском Кавказе», *Россияимусульманскиймир* №273, стр. 54-67.
- Ярлыкапов, А. 2015. «Адат, шариат и российское право на современном Северном Кавказе: итоги и перспективы», *Россия и мусульманский мир* №271, стр. 60-69.